

第2回 香川県産業成長戦略に関する懇談会議事録（要旨）

開催日時 平成24年9月11日（火）9:30～11:35

開催場所 県庁本館21階特別会議室

出席委員 竹崎会長、嘉門副会長、板倉委員、岩田委員、梅原委員、木原委員、獅山委員、関根委員、中山委員、山本委員（乾委員、井原委員は所用のため欠席）

1 新委員について

事務局より、今回の懇談会から、これまで経済産業政策について幅広い観点から企画立案し、具体的展開を図ってきた経験からの意見を求めるため、獅山四国経済産業局長の新委員就任を報告した。

2 香川県産業成長戦略の「基本的考え方（案）」について

産業政策課長が資料①～④を説明した。

【委員発言要旨等】

（会長）

- ・ 「基本的考え方（案）」は、前回の懇談会ほか、総論や各論でのワーキンググループでの熱心な議論のもと、整理したものである。10年後を見据えた県の取組みの方向性など自由な意見を積極的にお願いしたい。

（委員）

- ・ 基本方針に異論はないが、成長戦略の根本にあるのは人材育成である。本県の産業を支える人材をどう育成するのかという視点を基本方針に加えてはどうか。
- ・ 小中学生に科学技術に対する興味を持たせる取組みも大学等がそれぞれでやっているが、戦略的取組みになっていない。退職後の有為な人材を成長産業にどう生かしていくかの取組みも必要である。両方をまとめた人材確保・育成戦略が必要ではないか。

（委員）

- ・ 過去の産業振興計画や取り組んできた施策について、どの程度実績があがったか、なぜ実績があがらなかったのか、などをしっかり検証する必要がある。
- ・ 成長戦略を考える上で、県内の内需拡大に軸足を置くのか、県外に打って出ることには主眼を置くのかの方針を明確にして共有する必要がある。日本全国、世界を相手に打って出る場合、香川県単独で出ていけるのか。それに見合う強みや補うべき弱

みを把握するとともに、業種間や他地域との多様な連携が必要である。

- ・ 日本再生戦略の中で示されている「グリーン」や「ライフ」の方向性の中で、本県でも良いものがあると思う。例えば、「グリーン」では、「豊島」から頑張っていくということも考えられる。「ライフ」では、高松市丸亀町商店街の取組みは、全国に先駆けたもので、新しい試みである。
- ・ 選択と集中のもと、香川県全体で戦略を進めていくために、皆が関わっていける形にすることが重要である。

(委員)

- ・ 大きな枠組みについて異論はない。日本全体が同じような問題に直面しているなか、香川県としてどう対応していくのか。すなわち、人口動態の変化をどう捉え、国内市場が収縮していくなか、域外からどのように稼いでいき、また、本県の強みをどう使っていくのかを考えていく必要がある。
- ・ 過去の産業振興計画や他自治体の成長戦略と比べて、本県の成長戦略にはどういう特徴があるか、また、どういうところが似ているのかを分析する必要がある。他自治体と類似性がある場合は、連携するという事も考えられる。

(委員)

- ・ 「経済的ショックに強い産業構造」は二律背反的である。自動車や家電といった産業の集積が少ないため、ショックには強い反面、好景気時にあまり恩恵を受けないという見方もできる。「経済的ショックに強い産業構造を維持・発展」だけでいいのか。新たな展開を考える場合の制約にならないか。
- ・ これまでの企業誘致は、工場誘致が多かったように思うが、将来を見据えると、研究開発型企業の誘致にも取り組むべきではないか。本県に集積のある食品分野やこれからの成長が見込まれる健康分野での誘致を検討してはどうか。

(委員)

- ・ 基本方針は、日本全体が直面している総論で異論はないが、それが香川県ではどうなのかという分析がないと効果的な戦略にならない。また、人口減少問題では、供給面と需要面で分けて考えざるをえない。人口比率のみならず、実数からみた分析が必要ではないか。
- ・ 強みとしてあげられているものについて、他県と比べてどうなのか。K-MIXは、総合特区で見ると、産業にはあまりつながらないのではないかと。希少糖は本県の強みだと思うが、強みの程度や将来の市場について分析する必要があるのではないかと。
- ・ 海外展開では、香川県の産品がどこに輸出されているのか、その分析に基づいて、

どのような強化策が必要かという話が出てくる。アジアが成長しているからというだけで、本県がそこで商売できるとは言えない。

- ・ 基本戦略に例示で示されている施策例は、行政の供給サイドからの発想ではないか。企業に御用聞きして、本当に企業が必要としている施策を検討すべきである。
- ・ 分野を絞ることにより、成長しようとする企業の芽をつまないようにすべきである。個々の企業の顧客開拓や事業拡大を幅広く支援する必要がある。そのことが、将来的に強い産業構造が維持できると考える。

(委員)

- ・ これまでの本県の成長戦略がどうだったのか。今後どのようにしていくのかを整理する必要がある。また、本県の強み、弱みをもう一度整理する必要がある。

(委員)

- ・ 人材育成では、ニッチトップ企業の後継者・経営者の育成と、地域をプロデュースする人材や連携をコーディネートする人材など、多重的リーダーシップが生まれるような社会人の育成が必要である。
- ・ パフォーマンスの評価の考え方について、経済的指標だけでなく質を重視する考え方が重要ではないか。量的なものより、居住の魅力度や購入の魅力度など、質的な指標で計っていくことが必要ではないか。
- ・ 高齢化は全国共通の問題であり、これからの産業として健康予防ビジネスが重要になる。いかに高齢者のニーズを把握し事業化につなげていくのか、こういう仕組みづくりが産学官連携で必要となる。

(委員)

- ・ 新幹線が通れば地域は活性化すると考えているが、四国は、新幹線が無い唯一の地域となる。この状態が長く続くということを十分に認識したうえで、これを逆手にとって取り組む必要がある。
- ・ 定住人口は減少していくが、交流人口は、努力次第で増やせる。他地域には無い観光コンテンツづくりを必死になって官民挙げて行うべきである。
- ・ 備讃瀬戸の活用とアートを徹底的にやれば良い。アートは、間違いなくこの地域を活性化させ、その効果は全産業に連動していくことになる。観光は最大の成長産業になることは間違いない。

(委員)

- ・ 高齢者はシルバーとシニアに分けて考えられる。団塊世代のなかにも、高度な技術、マネジメント能力、マーケティング、リスク管理などの技能・システムを兼ね備え

た人がおり、そのようなハイレベルなシニアを人材としていかに活用するか考えるべきである。

- ・ 海外展開支援については、サポートの窓口を一本化し、各国の法令、商慣習、手続などについて、一人立ちできるまで細やかな支援を行う必要がある。また、海外展開に関する成功事例や失敗事例を要因分析して情報提供すると中小企業に役立ち、海外展開にも弾みがつく。
- ・ エネルギー・環境関連分野では、地域における自立型エコエネルギーシステム、循環型エネルギーシステムの導入を検討してはどうか。
- ・ ベンチャー企業のマッチングにおいて、分野が少し違うと上手くいかない事例があった。研究開発型企業の誘致ができれば、マッチングのさらなる後押しにつながり、また出口戦略を見据えて、研究開発に支援ができればよい。

(委員)

- ・ 現状分析が十分とはいえない。ワーキンググループで現状の分析を深めて、どこに重点を置いた戦略とするか検討してほしい。また、国のグローバル戦略の結果、GDPが下がってきていると感じているが、その分析が必要ではないか。また、内需を重点的に補強すべきではないか。
- ・ 観光の基盤整備をしていき、「品格あるまちづくり」を推進することで、他地域から人を呼び込むことができると考える。

(委員)

- ・ 高齢者が増加する中、高齢者に元気で働き続けてもらえるようにするために、健康変化をサポートする産業が重要である。なお、どのような産業を誘致するのか、その場合、従来型でいいのかどうかについて、もう少し議論されてもいいのではないか。
- ・ 四国の拠点性では、四国4県だけで考えるだけでよいのだろうか。各地域でそれぞれの特徴を生かした戦略や取組みを行っており、そのような観点からの検討もあるのではないか。
- ・ 本県では最終製品を持っていない産業構造が、ある意味弱みであったが、逆に、それを持っていないことが産業構造的に経済的ショックに強かった面があったと考えられる。一方でマーケットでは高齢者市場があり、環境や中心市街地に素晴らしいものがある。そのような面を生かした戦略を考えていただきたい。

(委員)

- ・ 人口動態の変化について、人口高齢化と人口減少の2つの現象が同時に起こっており、戦略を立てるうえで非常に重要な認識になる。高齢者の需要がシフトするなか、

高齢者を労働力として活用する仕組みをつくるといった形で、人口高齢化には対応できる。一方、人口減少は、国内マーケットが縮小していくから、海外のマーケットを取りに行く必要がある。国として、人口減少のマクロ的体重みを認識するのが遅かったのではないか、また、国のグローバル戦略については、むしろ外需を取りに行く戦略が甘かったのではないかとの認識を持っている。

(委員)

- ・ アジアの重要性は、内需を切り捨てて、外需を取り込んでいくということではない。内需への取組みを適切に行ったうえで、人口減少下における海外展開を考えていくものである。
- ・ 世界、アジアの中で香川の存在感をどう示せるかという考え方が必要である。香川ならではの産業、香川ならではの魅力がないと埋もれていく。アートを徹底的にやる、「日本でアートと言えば香川」とアジアに思ってもらえるようになれば良い。アートは、観光だけでなく、他の産業にも広がる可能性がある。
- ・ 地域に産業の魅力がないと企業の誘致もできない。本県ならではの産業の創出・育成の取組みが重要である。

(委員)

- ・ 女性の労働力人口におけるM型カーブの底上げができれば、労働人口の増加につながられる。少ロットの保育所の整備などが必要ではないか。

(委員)

- ・ 今後、基本戦略から戦術レベルに落とし込む際に、県内企業の強みをよく分析する必要がある。日本全体で、世界で、どれぐらいの水準・評価かを把握する必要がある。また、技術を磨くと同時に、出口部分を見据えた技術開発・商品開発が必要である。その点で、本県にニッチトップ企業が多いということは一つの方向性を示しているのではないか。
- ・ 本県では、多品種少ロットのものづくりをする企業が多い。このものづくりの特徴を生かした産業を伸ばしてはどうか。また、リーディング企業を中心に垂直的下請け関係にある協力企業群があるが、リーディング企業を重点的に強化し、協力企業群を底上げする戦術も考えられる。
- ・ 本県の農業は、高い生産技術を持ち、少量多品種生産が特徴である。ゆえに、農業分野でもニッチトップ・オンリーワン戦略を考えるべきである。

(委員)

- ・ 人口減少の要因は出生率の低下よりも、女性の出産可能人口の減少によるところが

大きい。人口が確約的に減少していくことを踏まえた戦略を立てていく必要がある。

- ・ 国のグローバル戦略によって、GDP が下がってきているのではなく、首相交代が続
き、そもそもグローバル戦略はやれていない。外貨獲得のために外需拡大をやって
いかざるをえず、どのようにしてアジアの外需を取り込んで、日本が成長していく
か考えていく必要がある。

(県)

- ・ 香川県が将来どうやって飯を食っていくのか、食べていけるのかという危機感を持
っている。これは日本全体の問題で構造の二重写しとなっている。本県の特徴やプ
ランニングしたものを評価、整理することが必要であり、今後、詰めていきたい。
- ・ 今回は前回から次回への橋渡しとして基本方針と戦略、場合によっては戦術的な部
分まで一枚の絵に収めようとすることに無理があったのかもしれないが、もともと
何のためにビジョンを作るのか、ということである。
- ・ 一番根底にある問題は、人口問題であると考えており、交流人口も含めて回復して
いきたい。また、これから香川県がどうなるのか、国と地方との関係も含めて流動
的な面がある。地域としての連携も重要だが、互いに切磋琢磨して競争する部分も
必要であると考えている。
- ・ 本県の成長戦略の姿を県民の方に示し、成長を前提として現状を明らかにし、議論
を進めていく必要がある。これからの本県の産業、経済活動をどう考えるか、どこ
に向かっていくのか、なぜ一生懸命やっていくのか理解してもらい、現実の政策を
さらに考えていく。次回その点を含めて、委員の皆様には掘り下げていっていただ
きたい。

(会長)

- ・ 今回の議論のたたき台となった基本的考え方だが、これを前提に議論すると、今回
のような議論にしかない。ワーキンググループではもう少し詰めた議論が行われ
てはいるが、資料としてバランスよくまとめられたレベルまでしていない。
- ・ 基本的考え方では、香川県の独自性が必ずしも見えないが、課題の捉え方や基本的
な切り口としては、ある程度共通な部分がある。これをもとに、戦術レベルに落と
し込むときに、香川らしさを見せていく必要がある。